

戻る

第五章

障害とともに  
生きる



## 私の仕事を発見する

「障害者の仕事はリハビリ」とばかり思っていた時期を過ぎると、リハビリをしながらも「障害者でもできる仕事」を探したいという意欲がだんだんわいてきた。いつからと、自分でもはっきりはしないが、退院後二、三年目くらいから直接リハビリに関係ないことにも取り組みたいと思うようになったのではないだろうか。

そこで、私と同じような障害を持つ方々に、少しでも参考になればと、私が挑戦した「仕事」の幾つかをお話ししてみたいと思う。

発病直後の療養期が終わり、安定期、回復期に入ったなら、リハビリに励むと同時に、仕事をするところが、非常によい効果をもたらすからである。

私の仕事は、社会一般の常識では「仕事」ではないだろうし、障害者の仕事としても大したものではない。ただ、「障害者だから何もできない」「何もしない」という落とし穴に陥る愚を冒さないですみ、思わぬリハビリ効果も上がったことをお知らせしたい。「仕事」の中身は、その人その人、なんでもよいのではないだろうか。

## 旧友と学徒動員時代の記録作り

「提案書『出発進行、閉塞注意』ある戦時下中学生の記録」

こんな標題で私の母校・南筑中学時代の友人代表に手紙を送ったのは、昭和六十二年九月のことであった。学徒動員という歴史的な事実を記録として後世に伝えようと呼びかけたのである。それはいつしよに動員に行っていた友人の一人が、突然死去したと聞いたのがきっかけであった。

戦争中、私たち中学三年の二クラスは製鋼所に、一クラスは西鉄に、そして一クラスは製油所にと、三方所に動員に行き、それぞれ違った体験を持っていた。関係者が健康で、記憶の糸が手繰れるうちにまとめねばならない。私自身も健康に不安があり、残された期間はそう長いとは思えない。私のクラス——それは「高良隊」と命名されていた西鉄運転士組であった——は、大方の級友が賛成してくれたので、文集を作成することにした。「高良隊」の隊長だった筒井君と久留米新聞を発行している森君、いま高校の校長をしている溝口君の三人が中心になって、この文集作成の作業は進められた。

当時の日本は、男は二十歳になると徴兵検査があり、国民はだれでも兵士になることが義務づけられていたが、それでもまだ、あどけなさの残る子供のような中学三年生の私たちが、満員のお客を乗せて、急行電車を八十キロ以上のスピードで運転したのは異常だった。こんな異常な体験を共有するのは私たち五十人しかない。その五十人も減って、十余人とはもう会えない。この文集の作成を通

じて、一人でも多くの友人に会いたいし、一足早く世を去った友人の霊前に文集を捧げ冥福を祈りたい。このうちの一つでも二つでも実現できたら、障害を負っても還暦を迎えることができた私にとって、すばらしい記念になるだろう。

しばらくすると、この企画を聞きつけて協力の声援が届き始め、関係者は次第に張り切ってきた。特に当時の女学生で、今は大学の先生をしている舟木嘉子さんは、私たちと同じ鉄路の上で青春の哀歓を送ったご縁で、失われた資料を求めて東奔西走してくださいだったり、消息のわからない女子挺身隊の人を探してくれたりした。久留米高等学校から動員されて「千歳隊」と呼ばれ、私たちの電車の車掌をしていた皆さんも、次々に懐かしんで便りを寄せ始めてくれた。

平成元年八月、私たちの『出発進行、閉塞注意』が無事に誕生した。そして九月二十四日、私たちの『出発進行』出版記念の懇談会を筑後川に沿った原鶴温泉で行うことになって、私は妻といっしょに出かけた。会場にはすでに今回の肝いり役の森君と溝口君が行事の準備をしていた。式次第を見ると、そこに「卒業証書の授与式」という文字がある。森君が「実は……」と、四十四年遅れの卒業式のいわれを話してくれた。先に触れたとおり、私たちの電車の車掌として動員されていた久留米高等小学校の「千歳隊」五十人は、卒業式の日（昭和二十年三月）、空襲警報のため学校は閉鎖されて卒業式は行われなかったのだという。本人の手元に卒業証書は届かないまま、空襲に遭った学校は卒業証書もろとも灰になってしまったのである。こないさきさつを、私たちは何も知らなかったのであるが、文集を作る過程でこの事実を知った森君と溝口君は、教育委員会や学校、関係先に奔走し、渋る役所を説き伏

せて立派な卒業証書を再発行してもらった。その卒業証書の授与式を今夜やるという。

「すごいな、ありがとう」こんなすばらしい友人を持つていたことを誇りにも幸せにも思う。

やがてバスが大勢の旧友や「千歳隊」の皆さんを運んできた。隊長の筒井君は東京から、「森山、腹が減ったな」といっしょに農家に行つてたくあんをもらった小野君は長崎から、米軍に機銃攻撃を受けた電車の運転をしていて九死に一生を得た江口君、クラス一の好男子だった樋口君、色白で小柄だった山本君の顔も見えた。この文集の標題にした「出発進行！」を大きな声で呼称することを私たちに指導してくれた、当時の運輸課長の泉さんの笑顔も見える。懐かしい旧友との出会いに話は尽きない。中でも印象的だったのは、西鉄に勤めていた江口君の話だった。彼は毎年、筑紫駅での銃撃被災の日には被災者の霊前に花を手向けてその人生を過ごしてきたそうである。

夜が明けると、みな語り明かした満足感に満ちた顔で旅館を立つ。中にお年を召された泉さんの笑顔もあった。泉さんは、この会の一年後に亡くなられた。あの元気な声と笑顔が忘れられない。だれも胸につかえていたものが流れ去ったのではないだろうか。昭和というつらい時代に「さようなら」が言えたのである。

そして私のリハビリもさらに新しい進路を求めて進み始めたのである。一行を見送りながら遠く走り去るバスに向けて手を振った。

「さようならーっ、お元気でーっ」

### 写真個展を開く

前にも触れたが、六十二年八月、私は写真集『愛しの大地』を自費出版した。この作品を長年のお近づきである女流画家がごらんになって、「私が紹介をしてあげるから、写真展を開きませんか」と、ありがたいお誘いをしてくださった。早速、私の最近の作品と『愛しの大地』を紹介していただいた方に送って予備的な審査をお願いすると、「いいでしょう」とご返事をいただいた。そこで東京・渋谷の電力館に正式な手続きをして、写真の個展を開く運びとなった。写真個展は六十三年十月二十七日から六日間、無事に開くことができた。ここにそのとき遠方の知人に写真展の報告をした手紙がある。いま読み返しても、その間の経過と私の感激ぶりが思い出されるので、一部をここに紹介する。

拝啓 いつの間にか、晴れた日には白雪に輝く富士山が見えるころになりました。庭先のニシキギは赤く色づきながら風に舞っております。

さて、私の近況ですが、写真展を渋谷のド真中で開きました。先日の写真集がご縁となり、渋谷で個展を開かないか、とありがたいお誘いを受けました。健康状態の不安や、作品をそろえる心配など、多少のためらいもありましたが、せっかくの機会なので応募をしたところ、無事展覧会を開く許可が出たのです。展覧会の準備には、娘と家内がほんとうによく協力してくれて、課題を一つ一つ解決することができました。(中略)

最終的に三十点の作品を準備しました。

案内状の作成は楽しい仕事でしたが、ただ会場まで毎日行けるかどうかの不安は最後まで残りました。家を出て渋谷駅まで一時間と少しかかります。会場の電力館にはハチ公前から徒歩で五分、名にし負う若者の街の雑踏を歩かねばなりません。いくら元気になったといっても、半身不随の障害者にとっては大変な行程です。雑踏の持つ無秩序な動きと、若い人のスピードをどうやって乗り切るか。考えると不安が次々に生まれてしかたがありませんでした。

もし私がつぶされたら運がなかったとあきらめるしかありません。会場に行くのが大変だったらホテルをとるなり、場合によっては欠席してもしかたがないと腹をくくりました。やがて当日の朝がやってきました。ちょっと緊張して家内と二人で、早朝の電車で渋谷に向かいました。渋谷の駅前はいつものとお若い人の群れが波打っています。その人波をくぐり抜け、ときには人にもまれ、ときには妻の肩にすがりながら、一步一步とバランスをとりながら、ようやく会場に入ることができました。(中略)

大勢の懐かしい旧友、先輩が次々に見えて私を激励してくださり、うれしい催しになりました。



東京・渋谷で開いた写真展。思わぬ好評で、大きな自信と喜びを得る。会場へは毎日「通勤」した。

受付をしてくれている姪も「目が回りそう」とうれしい悲鳴です。さらには多忙な昔の上司までもが激励に立ち寄ってくださいました。遠くの友人からは心のこもった花束が届いて華やいだ雰囲気のあるすばらしい会場になりました。

その日一日は、忙しくて昼食を食べる暇もありませんでした。

夕刻になり、閉館した会場を後に家内と二人で電車に乗ったときには、「疲れたな、明日はゆっくり休むかな」「そうね、無理はしないで」などと話しながら、いつしか緊張と疲労とでグッスリ眠り込んでしまいました。家に帰りつくとき家内と二人でお銚子を一本つけて祝いました。私は妻に「ありがとう」、妻は私にただ「おめでとう」と言って乾杯の美酒を干しました。たったちよこ二杯の酒がこんなにうまかったとは……

二日目、夜明けに目覚めると、昨夜の不安な気分は吹き飛んでいました。寝覚めはさわやかで不思議と体力が充実しているのに驚き、「やれる！」と心に自信のようなものが満ちてきました。「おい、行くよ」と家内に言うと、「だいじょうぶですか、無理はだめですよ」と自重を促す返事が戻ってきましたが、「いや、だいじょうぶだ。行こう」とキッパリ言いやることができました。日に日に元気を増して、ついに予定の六日間、毎日自宅から渋谷の会場まで通い続け、自分でも驚くほどでした。

別にじょうずでもない私の作品ですが、私が「美しい」と感じた光に出会った感激を、その場になかった皆さんが共感してくださったのは、とてもうれしいことでした。

天地神仏友人すべてに感謝を捧げた一週間でした。(中略)

その後、区の地区センターに場所を移して、仲間の身体障害者で渋谷まで出かけられなかった人たちのための展示を月末までやり、ようやく私の個展を終えてホッとしたところです。十二月に入ると、にわか冬らしく冷たい北風が吹いてまいります。どうぞ風邪など召しませんように、おそろいで毎日をお大事にお過ごしくださいませ。

敬具

### 「あゆみの会」記念号のこと

泉睦会(訓練教室)のOB会のリーダー、中田庸子さんは、以前、川崎でもOB会の世話をされていた。その中田さんが、ある日、こんな話をしてくれた。

「川崎の『あゆみの会』では会員の機関誌『あゆみ』を毎月作っています。もうすぐ50号になるので、その記念号を作ろうと相談しているんです」

『あゆみ』は、保健婦さんの指導的な話とか、本人の悩みや工夫したことについての寄稿、ボランティアさんが気づいたことなど、多くの話題が盛り込まれていて、本人の自筆原稿をコピーして作られていた。乏しい財政の中で会員は「記念号」を作りたいと願っているという。

話をするうちに、「原稿ができたなら、僕がワープロで清書してあげるよ」ということになり、記念号の作成を手伝うことになった。私の機能回復、特にワープロ技能の練成に手ごろなテーマと想ったからである。やがて中田さんが川崎幸区保健所の長原慶子係長を案内して訪ねて見えた。

ずから違いますが、それでも続けたい。思いつ切り謡うと、おなかの中まですつきりします。

再び「やめろ」と言われなかったためにも、かぜを引いて声が出なくなるようなことがないように気をつけましょう。

一日のうちに、しばらくでも自分の好きなことをしていると、「その間、不自由だったでしょう」とやさしくなれます。やはり家族に対することですから「……してあげているのに」と、いう気持ちからではなく、「私がしている」という気持ちで接したいと思います。私は自分を過信していたような気がしました。格好よくはできないのです。

これからも長いリハビリにつきあつていくのですから、お互いのできる限りしたいことを可能にして、裏も表も見せ合いながら生きていくことにいたしましょう。